増鏡

和書門
八七一六 一八八 九 一〇
類 號 函 架 冊

内閣文庫
和書
類 八七一六 號
一〇 冊
四 架
一三八 函

内閣文庫		
番號	和	8716
冊數	10(	5)
函號	138	29

第八

文永三年になりぬ。卯月に蓮華王院供養あり。行幸あり。一院も嵯峨よりおなじく御幸。新院は桟敷にて御覧ず。女院大宮の御車に平准后もまいり給ふ。人々まゐりつかまつる。おなじ御車にはべらせまつりて上臈女房の人のほか、おなじき色の衣をいだして、そこばくの袖口いだされたり。御所には上達部皇后宮大夫師継をはじめて十人、殿上人十二人、随身どもも思ひ思ひに装束つくり、居飼御厩舎人まで心ことにめかしたれば、御門よりはじめて行幸は当日の午の刻ばかり

諸司百官のこらずなし。左大臣うちすゑこうをはじめ
と。右大将通雅もれあふち花の下がさね。権大納言公蔭
おなじ色。左大将家経すはうのしたがさね。うへの
上のきぬ。侍従中納言為氏。権中納言通基。左衛門
督通頼。衣笠宰相中将経平。おなじくこれをきたり
下がさね。萠木のうへ色のはりの衣なり。別当定高宰相中将通
持三位中将実藤。右衛門督師親。殿上人八頭中将具氏忠秀
あの人〳〵は松重のきぬうらさね。蔵人のしろきぬおなじ
そのうへの衣なしとぞ申さる。あさまし。時の具氏をはじめ
の下がさね。つときぬのうへまし。とゝ人〳〵も皆みな
の衣にもあり。又なん。近衛将曹四人とりくすくまわり

はいしたなめでたかりけり。関白殿御車にてまゐり
給ふ。大宮女院の御車もおなじくひさしの北の妻戸
へ左右大臣よせらる。院司は大納言通成卿なり
をそうしをかく。楽屋の乱声などはじめのおとし
はるゝぎしきおこなはる。法勝寺の導師は
聖基僧正。ほまくれの引物どもいはずいかめし。法服
などのきよげさもしかれどもにほひあひたる。万歳
楽地久などまひ舞ども〳〵みな禄。関白殿よりおほせ
のうちぎぬ一重づゝ。くぎやうのとうまでそれ〳〵。左大臣より
綾の袿。納言は平絹なり。御門。亀山新院。土御門の御射
面の儀式などはじめて男は記録にしるされ。くはしくは別紙

の清書経朝の三位打紙にかきたるは色紙額はこの外
達そこしめされし長寛の教長の手本ざまやうやう
すたりけるものびもそれまで用ゐられけるかぎりて
すこし人々もみなうつくしくなりて今やうさらに
よ鎌倉に始めおはしましける事いでくるなら
とて将軍宗尊親王七月八日御上洛あるやうにて此のなら
てはじめての御のぼりもありしとかの儀式などいかり
なしもくるしからぬべきことにかしに思ふうけ
めでたくはのしこあやしきはあまたありて此のなりあ
そぱくてかりなりもかなしき此方にそれさかし
検校公にはらばかりせおとし給ひぬべくあるまじ

世々をたもちて時々につけて相模守時宗と左京権大
夫政村朝臣なり政村は相模の義時の四郎なり。
京の南六波羅は陸奥守義時の武蔵太郎時輔とぞ定
めたる中務の宮の御のぼりの程にかの時子の三日成
給ひて後宮は近衛の姫君の御腹ぞかし七月廿七日
よ将軍の宣旨かうぶり給ひてやがてさるべし給ひ
経任の中納言御つかひにて東へ下されけるにてくだし
なりぬ此事になりもせぬとて十月ばかり前嘉明門院参
給ひとぞ侍りつれ万里小路殿へは大臣かりたる御のらぞ院
のうへ御母准后など参りてまつりはじめて御対面あり。
さるべきことにも思ひまいらせける程にかくてはてよ

もん法の大将にははなれよくれど建長四年より十一まて
御下向ありし後つゐにまて十五年ぐわつど此比ほとしく
いとじつまてあづまの道させ給ひぬべく接しおり
作る法をまち井よりて人へ悔さびしくんぶそうなど
おぼさるゝおりくもありぬ御事にや
虎とのこゑまてあされし八むかしかたく
いま八嵐乃あかう世中
まこと當代いかんじうありさまのあはれ右近馬場の
うこんばんしよおもしろきしてよませ給ひける
むかしもいまのむかし北野の雪は跡ふりし雪
跡かたもなくよう川とも新しき

なきこゝろえず大かたこゝ法けるまん寺此都にまりまて
いしま次第これ人のくちにつたふるへし中かにも一野乃
浄くども霜しけきかなしも人ごとしふめてみくし
法会なすへし文の年十二月には亀山殿乃浄金剛院
にて十五日涅槃かん儀式うたしくちきこぬさせ給ふ
まてよりて又日此御八講に人くあかしあさうたり
とえらいぞめ次大数二条殿母も西八条まて故東山殿の
御すゝめにハ講をこれを世給ひ愛白も光明峰寺
またく結縁灌頂ありおこなわる鷹司殿すのあむ
りし此御方のうちの十三年の法事とて大文数ゆまて
いかりし記ことどもいとかす接待仲に給像乃阿弥

逸金吾将軍は曼陀羅仏ならびに恵心は僧都
はじめてまいりあまねく世にひろく供養し給
大唐の佛乃法を此国にはじめひろめたまひて化佛あらは
ゑんなどめでたくおはしまし御くりやうもかしこも
そうしたに上帝のこ耳にかんらく切濁しはいもぐさ
し安嘉門院も仏法事なとこあまた数かたしこも清
浄もいと御多くおそれくまゐりけり上まつりし給御
法乃さかりとぞかんじあへり殿の大将内
大臣になりぬ節会はたくさんに大饗なとこ
なかりけり尊者には新大納言為氏まいりし給御遊
あり錦のきぬしともたまはりて今出川中納言

実兼も琵琶弾じ給ふ春の曙おぼつかなくえんなるに
掻き鳴らしてしつやかなり文永二年東二条院の
御へ法ましめでたくせさせ給し事どもなかなかなれ
むさのこはれてもしつかにて四月廿二日より院
の人々文亀山殿にて御如法経あそばし大宮院もかく
書かせ給し御わたり五月廿二日十種供養の法経二
部浄土三部経もかき書かれへり設斎の法ありき御
ありけれは御ゐよりもあまたの人々あまりてく震殿の法し
はしむ浄土しやうごんもかぎりなしそとかんし
あまたの瑠璃のきんかい天に光をかかやかし金銀
のかぎり地を照しはなはだ袖をもよひかけし上等

は、おもしろきにも左大臣基平　内大臣家経　大納言
良教　資季　通成　師継　通雅　中納言公蔭　長雅　通教　経
後宰相ハ時継　資平　宗雅　雅言　具氏などはならしつゝ
盤渉調の調子を吹く。天童二人出て舞をはじめける
傳供などは入すまでまいるが鳥向楽を吹かし
より中将は楽屋にかへりしまゝに楢のうへと楽人
はじめのごくまいりて後院のうへもいできせ給ひて傳供
よ立てつゝ羅せ給ひしまゝにはあはれとなりけるなく
めでたし。関白康平大将とて左大臣内大臣これ傳供
りきこえさせ給ふ、宗明楽林風楽など奏してかけり
おほよそ御などすばらしき事どものこえすみたる也

なれ御前の御遊には筝は公藤　通頼　房名　宗雅　笛は
長雅　師親　相保　篳篥ハ實成朝臣　光顕　御琵琶新院
今出川中納言実兼　富小路三位公成　筝大納言二位殿
院のうへのさうしなれど、故入道相國の御女
とぞきこえし。又刑部卿中宮のわか納言新兵衛
良教乃大納言なとぞ召されまいられける。上達部
のまとへし、あむなんハ弥勒菩薩を作りたてまつり
ころほどこそ御経一部をしたる野、法ともへ郷
奉納いさゝか一部と三部経　八幡へ御幸ありて籠そ
まいらせ給ふ。女院乃かくらせおはしまし摂川
までおほしめされ、御にも佛法

いとかみを廻んごとれくれをおくしまれにしそ聖武
天皇光明皇后乃御さためしまやとありがたくうまき
まわりしがおとし五月雨つ旅にわりもたまさかく
高。伊勢此叉河も岸を流さしく詠え乃御まいりも
御船なりし。斎王もおの毎まで御ともはつらうまつり給
みちすがらおちうつむ糸竹乃あそびなどしてありし。
後くあそむくら此御代のちらのほまりあるをねがふる紀
例よますせらく准后乃宣旨まりなば御使よ中院少将
為忠朝臣くわしく事をよくよ殿上よ北して裳
唐衣給くいまふ。舞踏してのちみやこれ拙てらりな
どぞするべきうもかにけくにすまそし守しうも。

えんがつかちして御ばれ叉がらなあけりものがし事
などとを申たしめぐされどがうしくしくけど渡さこ法
ありさ海なきはむもくぐまうあてまりてぬぎての中し
なりけ月のころだのおらぐを乗承乃日野山廃へ一院新院
大文院は華ありば世よおさ給むしとはくきれ。銀金無数
御さしごとも螺鈿の御壷うちあしめあるれぬかどの事
どもなりに院の御だうれ小画衣皆々を飾乃御裳白御左
かは局二を花かとしあや奥繍などもて二階はくく絹をく
御双子紅御すずやはせてとへきおりにさうし乃石
なり鷲絃の御厨子楽器けぶくれあやめし寿かど
まて川くりくなりがら女院乃御から新院んの御かんなど

とおなじ風流なるさま。大納言二位殿より装束まゐらす
りきこよのあく。いとなまめかしうきよらなる物ども
あつまれる上達部殿上人ゆゑ馬牛ひく。御銀のかみ
をえくませて。松茸入れ籠など山へこれかし捧げて
ますくはらむのゝちばかりけりく出とあくきを
しめせば人々もよひこぼれさゝくみてすぎぬ
うれおもしろき安嘉門院丹後のあま代橋立ゆくむ
じあしてありしよ。次ぞまゐり但馬のきのさじかん
はくゆめしたくごし接給ふ按察家の大納言光成の三位
など法侶はつかまつ御前の女院の流ありさゝで文
はさやうさなう詠しかく絵にも思ひ出きしかもありぬ

なくて鳥羽川の事。法印の申うけにあのましく拵し給
ひきまかり。童舞白拍子田楽などいふ事あのませ給へ
しぞ。せし人の郁芳門院せも宮く申さりくぞおぼしま
ゐる。なかなか人くをばよううちやけどきぬの文給
ふやうはるなくといまめかしき院のうちなり。又安嘉
門院とのひぐ山の峯なる法堂まはばのよだてこそ
らせ給ひて。御観法などあるまゝは人のまゐる事
もなかりけり。にぎはしく住子もうけてのちせ給ひてぞと
のつる人をもめし御所又そのころまで秋の御月の御出
ありくいとおもしろし。ゆさまさしく雲ゐのかんしく
さし給ひて拵へまじきなれども。一院大宮東二条院

などみなはしめはなやかにおはしましゝ御あたりにもあまたおはしまし
おはしゝ公相常盤井入道殿実氏もさそひ給ふにおなじく左
の大臣実雄久我大納言雅忠などうちつゞきぬるにて
ばかりまで大政酒まいらせおほまつりあまたくよそ
まうちきみかずそはり給へるは大かた本院の御姉
さまかはり給ひてもいちはやうこそはありけれ御
公相官位きはめ給ひぬ中宮今出川院さへおはしませば
また東宮降誕もおはしまして家門の栄花おとろへ
かの次実兼もきはめしう給ひぬるそのこなりぞ給
かくも思ひ給ひぬるひとつのうへにのそこり
なん侍りしとや給へども人〳〵なかなかめでたくおはします

なくなんおもひおとされねども実雄公は中宮の
御事なくのちまでもいでやと耳とまりてお
おぼさるゝなりし一院なとも事わりなれば
きこえしありし入道相国よりのちもさもぞうちめでべき
からなんし給ふぞうこそおいつらくもためしなきは
ありわびく親よきほどりちしみぞれしひのせりな
らかねて老らく子よなくなくみそなはすらとこそ諺
明が郡文よさりがたく侍るとかむやかなと申給ひてうら
こりて遁給へどもこれひとりあはれなるきこえたまひ入道
たゞ御心すゝ深きの御袖ぬらし給ひなかなか
りりありし文そへにこし大風に給ひて人〳〵代家

くそと一切のねんずる事かなはずして中に明堂殿
まかぬ。山のうちには木をもて人形をつくりて宝
殿と金をもて入たる寳あるを眼とあてゝけかれぬ所
あり。その外つくしもあやまりてかくつる人を自然に
まけるぞ。たとへるしき。陰陽寮の守護神の社もま
ろびぬ。山の文殊楼。いかりの中に文殊なども焼てこれ
もなくなりて、きしかさ紛も念もさすめしさかてさ
風たり。西明のうちには人の家とされから吹あぐれば。
的なる人をちりもの座しにおちてしまう世なれとし
さきなぞめづらかなるがあまりにかくおびそらし紀
風南まへば御たち占をこあられ多くあらもかまへたへる

はつしそがあるうしぬたなと養しくぞ其西園寺の
大おとゞ公相なやましくして結ふとて出く書く
修法読経まうりもしへなどかしりましくひだまの
しもつまでどうまこそりひたすくて十月十二日とせ給へ
ぬべ道教とはじめたわりしかげ兼を入くかたぶこ
中京も法服すて出給ひぬ此かるは徳大寺の大おとゞ
実基の流ひとつめたまへば、その法服はさうにはな
しあし。中宮とを納言とそてめし。女房より
こゝろうしきかれど此式るの法なまなして、おとゝに公基は
たもくくはかまさたくしすまでどいう門までまかれ
の法なまたすされたりびつおとゞ入道殿よりへすそし

なさけなくれいならぬやうなどおもへしられたらんそれそ
こまはさまのこたすけくへまかりけるとちや法もさみ
後法性寺入道殿の御おもし難きと人のめすことも
けるをそめつゝられる御報の志まゝみしりせて中すれ
ともふ法皇の御くらしましくされば御法ともやまつるに
かく御おすまゝらべの入事おもく おもかりし此記しか
とらや東山の方そりおりあ御人とらりてたるとそ給
まは給さけりしく中かしきか中宮の御をりおりなどともふく
お御きほめかしてれば いとほしくあさましけれまで
まぞ世人も思ひゆき給おかりし一事と披らし
でおくたまでもおぼされけるおしくぞ女院の御ゆらく

もとまてとみえさまりせうりり十二月一日こん皇后
宮又御産しく天下ゆすりて よろこをいよとめ玄のかた
こみこ 多度院 むまえまゐ給のぬ おもとぶ中かりとのはんの中
思ひ居るべし。いとを我妻の方けめるらしたまま
給ふといろ紀御事ありゝくまでたそやしてまへ給
給ふ御心より御 撰まの御きいの妻とあるそれ
ども又それがしれらくめ川の近衛の左大臣殿へその方給
攝録まいらぬ廿二日そなたし給ふびとめでさいる
まゝさせ給ひ墨の座どの北御太郎君ざりし。御杯
ト小女院よりり御馬ぬり給ふ大文院御琴東二条
院の御笛など賜物ども川のてふある本

西谷殿と申も源心院殿関白となり給ふ

第九　内野雪

正元元年十一月六日譲位の儀しき常のことし
し十二月廿八日御即位の儀めでたくあらまほしか
ぎりなりさてとしもかへりぬおなしき廿日ごろの
二月太上天皇の尊号ありて新院ときこゆ本院と
は日ごろの日とハまたよにさかへ給ひあそびたまふ
御中もなかなかいとのどやかにめやすくぞありしさま
よおりしたゞなぐさみやうなり中々文も院号此のち
東二条院と申也二条富小路にすませ給ふ世の人
きおいしも入道し給ひぬ常盤井とて大炊御門
京極なる所まぞおりくよみ給ふ。あの入た名の

はなさとくにそのころの右大臣実雄とてさてゆかしき姫君
あまたもち給へる中にすぐれたるを見給ひきこえ
りのおぼしかしづく今上の女御代にいで給ふべき
と望てさ此ほのぞ文応元年入内あるべくおぼし
おきてたり院の御気色よくて給へ道家の
孫の姫君を御いり給ふべきゆへにあまりとはしも
やはらかに思ひしらせ給ふにもとなげさはのおはしべしこの姫
君のはゝしとおぼさるゝのに給へ中にもそのころまく
中納言公宗ときこゑ給へるはこの名あるもんたち
そまくなりよくゆかしう思ひ給ひてかりそめ
はなるゝとあるまじき思ひもよらぬわしき

またりのみんなくれしさておぼえつゝあしみ程なき
ぐちしそぼのそぎのちにくるはげくも紙の色し
きぬくのことかきすぐし給ふをおぼしうはうへ御に
うせ色御しらぬおぼえ神社の桜そしけかもしえん
まつゆふぐれはおとどわすれ行ひとくかくたまへて姫君
うすく女御花など見さがすへて几帳よすまう
その川まゆくねるをまへれさ御ざるちはねよらしもいふよ
しかくおそ小白ひみちらく給ふしくみんし給はく
しいとあはらく又見此扇とうやともろげさよん
はあしてぞすゝし文なすむがこそでかし給へるかすら
おまやうかひとひうゆすゝきてまずをまするあく

わかくしげなる人はいとおほかりめでたき人がらにおはしまお
まへなる几帳(きちやう)なりしもよりそばへ(?)にかくなれなく拍子(ひやうし)うちなど
して琴(こと)笛のねどもまゐり給へるおはしましも中納言
まゐり給へりしおりしもおもひかけずめでたきことゞもの
藤原のちかよきつひ給ひし御弟の藤つみの君しもなそ
又いとめでたくあくまでしめやかなるひのそこゆり
うちそへ給ひけるつのひせしかくやうすてさまやこ
まなびめしうきとみゆるうちにしておもくなりしん
もしのびくりて志同めぐくさりく胸(むね)を念(ねん)じ給ひ
まう升とくまへ給ひなり覚(おぼえ)すこしゆかしく給へ
衰(おとろへ)井まもこおぼえさし心地なりしに給ひし御琴(こと)の

新乃ゐのゝけしきけなくかきあはせてひとへなとすく
きゝにゝたるけはひうきぬべきとはまほなくもなく
おしはかりはべりしこれ露(つゆ)もはかなきしめやかなる
あいらしきさまにてかくはあらまほしかりけるすこしかなしき
おりそのまへなかうかゝりしかなしみやかなるもあはれと
みゆるをやとかくし給ふまゝしき見(み)かはいるの
はかなく清(きよ)らなりしてらくそくひなきはありさま
ども御もりはべりめしらぬおぼえ給ひなきてまへひ
まゐらせたまへしに十月廿二日まゐり給ふつぎ
しきこれもいとめでたし檳榔(びりやう)毛(げ)の車十両一の車右大
臣殿(?) 二位乃中将 まうけの女 三位の中将 まひゝきうの女 とくやすし二の車 春日彰子(?) 大納言(?)し

新大納言は為家卿の女とかや。やさしかりしやう
きよげに下向してくだくしかれども、むつかしく侍さ
うし妻柳梅枝ある紗ぬき川といひし。これは夢川を
御門叡覧じて姫宮一所いくもの給ひ
きぐは姫宮いまだ忠は近衛関白基家のむすめの政所より
おり給ひまさぐ給ひのまつりを女御の后に政所の
めでたく出まく御やしませばよりをおもかしはきおくり女院
は十六才でおり給ふ。御門は十二の后やしなはれしまはせ給
をとめしもおもくすげ給へまばめやとれとかわ
あやまちがら下くゆかんらゆをいとうきつ給ひし
かのさまて給として胸のこく御しきさ給かまはせも
この門へきんらし給をぬそ御身はいのみなり給ひぬと
ゆとみしきれとうく后立おやしかども、おもくぐち
給ひさそおぼさ給ふ事なりけり。西園寺の女院きん
さしつづきらく参り給ふとのさ御みりんと御胸つぶ
まどくおおせとはしをあしほどまどまも九年ぞなり給ひ
あそび泉乃おとくぐ公相乃御女なりし。大文院は御子より
し給ふとぞやなし。いづまもてかまぬ御中まいと
みさしつひたまのへやど貴いへきは事もあるべし。
文ばらきのさしむかく歌しそむしし人はむかし給く
ちへあなさぬし給ひされども、いまは世の人の御心ざし
をあまりすぐすゆめくみんやびとをえんてとはおもく

まぬかるべし。されども后はさすがにつまへだてける中
なはあがりて皇后宮と聞えさせ給ひけり后はおぼえ
よのことは入給はさくきこしめしもむつかしうてまゐらせ給
はねばはおぼしかへ給ふとりざ御心にきこゆるをおもしろく
あるべきを世の人もいとおしうそしりきこえけりしや
ましくおほせどもはかなくも移ひ給ひぬとぞ聞ゆ今
きうしも下かくおほしのどめて年のはじめて弘長三
年きさらぎのころさる世のためしきこえたかき
のみすこしもと御よ。春風ゆるく吹きて亀山殿の大井川
桜かつうつろひそむるに宮しればいはんかたなしつれづれ
御幸あるべくおほしおきて。関白 二条殿良実 もの三年

ぐらり文字きゝ給へり。三条内大臣ども花をおもひて
御幸よりもはやさきにまゐりまうけ給へり。その日の気
上達部のこりなくまゐりてきらきらしく
釣。新院も大宮院もまうで給へり。汀には
舟どもうかべさせ給へり。きさらぎの童のおもしろく
ほどのせきく。花のまうけよりこゝろのごとくにまる
おりしも。舞楽さまざまの曲どもをはじめとして万歳楽
王は蘇合のつらなる。万歳楽花契遐年
といふ題たまはりしや。関白殿上の御せい
まつりきこしめすよし申させ給ふ
千と桜や花のみゆきますらん

おやうれしさまでをやめてあくなりにしもまた
ず御子まゐりしかへしぬ。かくて世給へ御ほふく
ま絶えざるべくさぬくなる中にぞえんぎの御世
を営むおほぬる御梅のはなり枝にはけさへまゐ
らせ給ひさりく。院のうた　後嵯峨
梅の枝に代々とおもひし乃声かけぬる
今日しも次き御子営の鶯
所々しばしば院まで近くて光代は弥うして
くらる。よきこともみゆ御月のこる本院亀山
院もすそ妙法経かうせ給ひてありけるをなき
事かなりし後白河院のそのかた〳〵の八せて給

給ひくれぞきものかなしみて後の事あかいと
いくおぼしめして世給へ御へとうじきは頼むきの不
さ御方のあまりこれたび給ひずかへ。おほく花山院中
納言はかく一人さ梅にむひ給ひ候ひやことにかき顕密乃
公卿上ども給ひあひむかれしとて上東門院もおなじく
給ひ給ひておもかしきめしけるや大宮院おなじくあ
世おほきにまゐりたまひて十種供養させて
同院は浄金剛院へ御わたりしおさめきこえしまゐるを
同日太政大臣上達部おなじくおほくつくまへ
らまつけるもおほくめづらしきこと面白くぞみえしとぞ
一九月十三夜亀山殿乃殿上數寄ありて歌合せさせ給

なまよみがへらせ給ふは白河院にても鳥羽院までもな
しるしげなりしとぞかの法の三はじめて是なりけり
ぬしの御あらはしたまひし小野道風入右は関白殿よ
て行じもえすとるみへ院の法ありすて法
成せられたるも世の数ともいはれ圓明寺殿又一条殿 新
院乃御法のはじめ川かく桜殿すていませしぐ又ぶ乃
二しも世にも行ひしせ給へりける其実白院の法ありに
さかりも世給ひその所さくれなりぶがも右は實白
今出川のおほきおとゞ實左大臣殿より
志るしこれまでのみちの上手とぞなりけるさ大殿よりかせ
まもくはくまもそ風流の洲濱流りて持くれるえ

に銀の冊二つに分く 其文紙とりたかさすそへ一まれね
数も流まさくはくりて冊にほりて執筆の證師一
度に御前にまいりあそばしめ左興氏中将右衛
家なかりも山紅葉寺院乃御製

我うへにくみし浅山のもみぢ葉
かよふは何ゆゑもいろうめまさむ

沈非に左衛門督乃教まえさせ给ふ披講しけて長香
約なる法ありしひもし御家の筆花山院中納言長雅卿
通乃中将。笙公明乃中将にてぞおはしませしとや。ひちりき
あまたすけ乃中将。琵琶は法にきもしく入相具氏乃
中将も包さき共れしぞ御簾乃うちには御琴とも

絃あはせ給ふ。東乃法印ことゆるえしハ新院乃
御子又乃法印母君ハいや。刑部卿の君も見へ給へり。樂をひ
きそめ給ふ折月さえて左大臣大納言通茂など朗詠
し給へるまゝすけきんあきこゑくらべ給ふやうにおも
しろし。源氏なかば過て暮かゝるにすごく月ハ迷を
さけなかんこちとゆきおぼし此山のもみぢ葉乃錦
とは是をいひけん吹おろしたる松風にさそはれて諸
なのもの御みきまのあかりけるにうちかたぶき給
あかずおぼしえんなるおとにきこえてし給ふ。ざ
貴人くへいふまじくいはざり思へ給うらみされたるま
まゐるほどに御あはれけんとおぼしあまるたびかくて

明けくるも名残あかず覚へし。御としまもきこえし
ごろ前内大臣基家前右大臣の大納言入道侍従二位行家
光俊乃舟入給ひて御こゝろざし給ひて撰者此さまあまた
ばかりぞうるはしくあまたはきまるべしときこゆるなり
みそめでたし。此元久乃ころめしとぞ一院ありしかくれ
かせ給ひてびはし玉はらるおもしろきにとぞ我
ゆるへき年月はそのへにいかく雨さやはなる
られくはかくへのこ御さとる世給いはあり給ふのにて
きこふあの集此序をあぶまぐしきまいはあき我母は
春風に浪とおこそんと称する和寺此をきこゆる
しげくめぐり秋此月にたちとおもふしめむかへりや

ゑらばせたまへるが。こゝにさだめてそうしけるや。金葉集ならん
これは此子乃ほうしのおしまれぬを得しめ玉ひしが。こゝには
二代あげさの中務乃父の御かのりぞかられ給へるが
家にかへしとやむごとなかりし。新古今此時あつめられ
し竟宴といふ事おこなはれ披露ありしが。これより
集とは續古今とや申すべし。文乃年 文永三 あげさまよく
よろしぬ事出来て中務乃ほうしこそこゝのかりせし
まゐらするもかくあつさてしうれしきありけり。給
けんれいなれば時頼朝臣ありきにばさいのかはりしるき事
なりけれど。父をほう子乃惟康の親王よ将軍
族づけらる。文永三年七月八日よひ披露ひねぱた

びのがり六はしかそへたり 檜皮屋ひとつある。
そこにおはしまするはそこなる披露かやしめや。こゝに
川へかゝる御ありさまをかし月もすゞしくは
うつくしきものゝあはれ浅ましきおほえ侍るや
虎とのこそあらはれしはむかしにて
みよし嵐乃あらしよの中
流石もおやすのゆのしとはしますぬ給ふて
御斜面もおくれしと思ひとさきさ被
あまりひそりて續何の大納言はかなく下臈なるましき
ゆつりかくてつまれさかきなとるしらしと
ふあけらぞくるかなしぬて心なりてゝもおはつる

承明門院の御あとへいらせ給ひしかば院へもたびたびは
御まゐりなどありし人々をはぐくませ給ふ御お
うびなどもし給ふ。雪のいとおもしろう降りたる曙に
右近の馬場のかたに御ゆきしてながめさせ給ひて御らん
ぜらる
あはれむかし小野の雪の跡わけし事
御なにしあふこそ小野の行幸も忍ばる
世をかへてむなしき思ひよりながめしにも小野の雪あはれ
御子の大臣すぐれてよき世にいでて深くいとなむ
侍りけるを承りてほめありしかば古きの御門も
ありしのさまにおぼしなりて実氏の大臣

きこゆるにもいひかはしけるとよ。やさしや。此事ども
なひかはよりかくおぼしまゐらせどおぼしなげき給ふ
なりゆく。日ごろなげき給ひてすこしまろうどゆく
かたへ此ごろはこのごろ二条富小路殿にお
院新院などうつしまゐらせ給ふ。さてしも一かたぬ
かの御あそびありて、大宮院東二条院も御几帳のわ
たりにさし出でおはしまして御まのあたり公相常盤
井入道実氏左のおとど実雄久我大納言雅忠などもさぶらひ
きこゆるにさまざま御みきまゐる
るゝにはしたなくこそたれ給ふおぼしきこえ
給ふに本院の御さかづき給ひてまちうけ給ふ

御せうと公相官位とゝのほり給ひぬ中宮また
しませば皇子降誕もあらば家門の栄花にま
いろそはしぬべかりしに美麗もさすがに給ひしぬべきものて
なかりし御めでたさも思ひ給ひぬ深きとし月の事之
いはんかたなく侍りしに御へぞ人々何ともなく悲
ばかなく思ふ心の程ぐは中宮の事もならせ給ふとぞま
うせにけれ見てそ年ありしつらき物思をひまぞの中
御にけるなし。一院八なかなりし夢へめて乃定の事も。
いのちもの入道相国まされはれめでたさらんしられ、
うしこれいにしへ思ししめしきはありけるし親まさ給
あつさしことなりしひの地よりなしなみを老くも侍り

きくはしかなしうきはせなれがなとこそすゝきされ
とられさまな願文まえるたまく侍りしかなじくゆめして
うつしなりけれきこへでこれいとあはれと思ひさ給
入道殿ことものゝくすかんそめの法被きたりけるみ
えらは何くさみにちいくかとなくさやうに給ふりしき
こあれとさしもやいとおぼえしないとあやかくこ
後給ひぬ冷泉太政大臣とも侍りし事也入道殿の
浄心の中侍りてこそ八わたしけめ中宮も法服ありて
まうで給ひぬ姫宮ども宮などいとく拙し給ひしかど
御つくらせ給へるをば門とはしめさまてまつりく
悲しくおはしきはなれぬもの文をぞ見侍りし

きおきさば、いかでとおもひしさか山くちかくは法然
あらくみつしばしさへずわきて文らちにおもひし
てはいかばかりかせんとおもひし母かのかたちをやすらかに
猶さまり給ひおもひしぞんし大事かぎりなし但しひちらく
なかも給ひぬとて土御門のせうめいもんゐん承明門院の御あとへうつろ
世継よ世中もいかにく天下乃人あふれをくぶれまを
有あるかどのみちのりおこて誌しめられ川よ愛き
くらの人々いましてんをさへろすじあらてし。
おくじかぎりなき御じをとりて愛宕乃供せんまもる法
調度どもの中にまぐれて御宝とおぼさるゝ法
まおさりし。后乃文兄つりしかば世給へ御文へて鎮

よあめしきあるまじく、まつりはさまとひ給ふ急ぎまでいみじく
くるを宮子一人とてやはらかにときこえけるいとかなし
御こゝちよやゝわりなくおぼえていまの文永四年十二月一日に
生まれ給ひの法花のけしきもあはれにさけびとよむさま
いとおそろしけれど御いのりの志ある人しまもりえ
いでたまひめでたくみかどのおとこ御子後宇多むまれさせ給ふ
うれしさのこゝろさへそひてもなほはるかへのぼる
つきらるゝ法んぞしまそへくいよく物ぞさまり
くきこしときこしめし給ひてをいまぞ御胸あはく
んかうひ給ひし新院の御文も伏見院まの御愛の法縁
かくてまはり東一条院乃法の此中にてはりける。

くるゝ又うけんやまやむでしかきかくてはあしもしたがひ給
ひきうしめしけつきぬるまつまとぢおのゝ文をかいけ本
院も大宮院もきこえさせ給ひてもやしかしつき花
まつる世語に仰せ遣も中宮の御方さしめいて御くしおろしめ
よはあさましといふぞくらのことはありしと西園寺さふ
まそ一とさあつれ松殿しむそ御れにきこえさせ給
こまかに人まれ

第十　あすかの川

ひまゆく駒のあしもはやくうつりて文永も五年にな
りぬ正月廿日本院ハかくてしきりに富小路殿にて
今上より御の御はかりきこえしめ給ふべきよし御沙汰あり給
ひくさに聞えし正月に閏ありて後の廿日あまり
ほれどかれお冷泉院にて舞楽らせおはしますべき
院いそぎおぼえ給ふに世語にべうれハ法勢あふぎ
いさゝかより世おいそぎ給ふまきて極楽寺もしめて儀式
内裏まてその御まゝ試楽廿二日とききこえしと
あまつかたくあくる日はとめさく人くまゐりけるよ
新院ハ後深草かの御ゆかりにて後語へ里寝殿の

御階乃もとに一院のおましまうけられたり。それより
ひむかし新院の御さじき、東に大宮院東二條院こなた御方
にて二位まうでまつる。聖護院乃法親王
圓満院なとまいりてまします。土御門の中務乃宮宗尊ま
いりたまふ。上達部殿上人あまりこそりてさしたちまいりて
仁和寺御室梶井の法親王なとこゝもとにさまべくさふら
はせ給ひ給ふ。月花門院花山院准后たまゝは大宮院も
おはしますに御簾ぎはに御几帳立てしのびやかにて
給ふ。殿褻の人の中の間に神くらなどもはいりてめでたし
の御かた大納言乃二位殿南北にさふらふなど御心 と
勾当上臈も院乃おはします御簾乃中にて

はなやかなり。まうのぼり給ふいつゝきぬ白きすゞしのはかまに二あゐ
なり。東のまへの一間は大宮院月花門院の女房ども
まゐれり。はしの御まへの二間に新准后さふらひ給ふ。御方
の上の御さじき関白をはじめ左右大臣内大臣兵部卿隆親
二條大納言良教　源大納言通成　花山院大納言師継　右大将
通雅　按察大納言基具　一条中納言公藤　花山院中納言長雅　左
衛門督通頼　中宮権大夫隆顕　大炊御門中納言信嗣　前源
宰相有資　衣笠宰相中将経平　左大弁宰相経俊　新宰相
中将具氏　別当公孝　堀川三位中将具守　冨小路三位中
将公雄　これ階のほとりに座につきてさふらはる。東の二乃
間より又西の左大臣実雄　二条大納言経輔　前源大納言

雅家中宮大夫雅忠 藤大納言為氏 皇后宮大夫定実 正
親大納言隆行 帥中納言経任 このほか上達部あまた
なりし乃中門の廊につかうまつれりし殿上人は透渡殿より
くしなるまてゐあまれり西表によ多くゐたる
かたの御前よりて一条人々をはしめて裏色乃
中ねかさねたり池乃汀にしほりむしさき紅乃にほ
ひすゝきはしまて梅とかされあやしのかしこさぬ
紅のこまかなるもこよなくねたるもけしきたてまつりすかしたる紅の
はしぬきさくらもすゝしき桜ひなぬしとあまなたな
けしきんこにて大炊御門中将冬良けしきをひしまや
装束はきさきのかりきぬなゆきとつまりさねのこれしよそほり物也
花山院中将家長 右大将乃御子魚綾乃山吹のかりきぬ
柳さくらをぬひ物にてちりかゝれる紅のうちきぬかさねたるや
いろいろのみえへしてあやしき唐木乃ひのこころぬ紅の二重
乃きぬにかへてぬいたり物れむしき紅のさしぬきなどいまさく
たまぬりのましてあやしくしとうつくしう御子二条花山院
かね乃ねしき侍従は師継れ作すかは桜乃ひたひかりき
ぬ白きいかめしくなやとむすかたるにひすさえつゝ
梅柳いてうまきをせさひくへ付られたる海めしくえ
ひるりおほ紀乃めしきの表衣に乃文をおくおの二
きぬなかしひとへむしさ紀乃さしぬきさはまもやか
ぎはくてとぬい物まひろくれいしくめてたうらぬ中宮

権亮少将公重実衡乃大納言の子かしこまりあ乃櫻
かさねもえぎのかりぎぬ紅のうち衣むらさきのふせんれう三
きぬ紅のひとへさしぬきまいの時ぬぎたれはかくして
しろくぬひして堀川乃かね基俊がしをかきあはし山
吹三重乃かりぎぬ柳さくらをあはせくみれるなる
よざくらを文くりかへまごまごろのうちかさね櫻
紙さくらはけぬしてくしちがへと泥そく金乃文より
てなくみちとはくぢよりむはくじ此三かさね紅の二の
きぬ日へくおれをそくらは二条中将経俊良教
の大納言の子なりおれもかしきをやまのはくみ
もえぎ紅すそ衣つゆおなじひとへおりもの紋袴亮

中将実守これもおなじ文かざしざくら此こきあを
すいの二かさね此ひとへ馬頭たかとし隆親せうそくよ
やなぐいのあかいろのかりぎぬむらさきのさしぬき入あとき
奥綾のうちぎぬすいのこきぬかさねて二重ひとへ
うすあを乃はりぬきさ少将実継ゆかりかりぎぬ紅の
うちきぬむらさき乃二かさねおりものを色くけぬいまの
さくらあはせのかりよにまいりてぬかくして陵
王乃童は四条大納言此子隆教はのちくたれとも
らさき乃ふくさまのもんおりものにて萌黄地乃あ
きの錦衣あとかさ奥綾乃ちそうしやうくまのみなえ
星まだ紅のうらふまもりてあからさまにつかうまつる

こしくみえて何事もめでたくみし給さまかはりなし
きらきらしうなまめきて笙はあきの記宗実、ちゆうはとき、笛なりゆき、大
鼓義茂、かつこはことにおよばず。これもまづ二の舞の人のかはりにて左舞
萬歳楽、右地久、陵王、納蘇利、青海波、太平楽、入綾、実冬は
こしく舞ひすさまじきまでよし。右落蹲、左春鶯囀、右古
鳥蘇、後参、賀殿の入綾、実冬舞ひしりけりや
くれなきことなればあはれにおやおもふみる人涙おとしけり
はるかくもあつまれるのおもしろし。二月十七日に
又新院富小路殿にて舞御覧あり。大宮院もまゐり
きのふのごとく、まづ一院の御幸は日高くなりて
なりぬ。冷泉殿よりたたせ給ふ。まづ楽

舞人々装束どもは上達部かずこれおもしろしはぐく
庇には車に十二人。花をたちかざしきを裁
つくりて、御前などやうのおいのしりそへて
くさまざまにはなやかにおもしろし。新院はえび
うし(?)蘇芳衣はりこのみて中門よりまゐりたまひて
さまにまつかはしていとえんなまめかしく。御車中門
ちかうよせて、関白殿はまうけのまゐりたまひて、御遊びはつる
ほどに二重織物の表衣、紫の几帳のかたびらを
いとさまざまに、かくて平塚のさねどもは御奥はなやかに
てかしこきまでにきこえ給ふ。亀山院も御随身の角(?)たる
かしこき程なり。太后上達部おほくみなにしきまでとま

いりくれ給ふ人々おほかれどこれはあかずめづらしく実

名に負ふ花園のうちの山吹乃ひかりあふね二すうちもえき

うしかと思ひくあそろくまぎれにこなたりへ

くさまくはなしそうりぞ咲ともしれおほね出れてびれた

さくらもえぎされ五重乃うきぬ絹乃あふひのふさぬら

ちよさね見て風うつさき山吹のあひうきすり摺れ三重む

らへむしさ花のあや乃さしぬきにまほさくれくけう

いふみえ給へりこれ由都るまかりく給くふいのさぬと

きこえり。万歳楽とあいこすて楽人舞人まのあ池乃みぎはい

よ拵とそうつ春鶯囀古鳥蘇後参輪臺青海波落蹲

なとあり日くらしなりし給くれいしおもて帰ら

被給ふありけれ。赤地乃錦の袋に給ひて入くさそてまゐ

らせ給ふ刑部卿乃君給ふを此由しらいふ次右大将にりて

後の給はまへはきしきたることありまいに胡飲酒乃舞を実俊

の中将とうりをくいはのし給の父おもくみすすよらつ由

りとめしかへし近衛前関白殿の御子三位中将とくきこと極

めいまうし臺みゝく舞うまい別しては此試楽よりわき

きかめにしまや内くく白川殿にてそらさことあまりに文乃

有にし孤篁乃うらやまて见ん給ふ。薪寒はとうれくしう舞

すますへで院めでさせたまひて舞乃師をまくさもちぞく

給はりたまし實御ぞやうにまきてゆるかぎにふむそけり

の軍といふ事おそろしく御製がで源のとぬ人々く

くちおしくかんがへしとおぼしき事ぐさりなし。
扨もうちはまゐりしたかやうにして御法やすめめ
と公家武家ともにさめのはしたなかりけれどこゝも猶なく
おぼしまかせていとめでたくて今上此御事六月廿
六月親王宣旨かうぶらせ給ひき八月廿八日坊に居給
ひぬるく殿やうれ給ふ付くも入道殿ハめでたしく
おほさせ給ひにし此さうぢら給ひしなげきに今
はんく此このよしめでたくも御世乃事しれをかして
そとんしてまいぬしとおぼしすぐさむ。中宮の御服の後
も院のかく給ひ御よ給ひ則人給うしめしけなり世乃
なりゆくなり。一院御かたに、げん事とおほしくおぼ
まとぞ此年乃九月十三夜白川殿にて月御らんずるに
上達部殿上人例のおほくまゐりければ人々歌合あ
るべしとて此女房どももめされてよき歌ども撰ば(?)
五十首のうた合盛くの風流にて上達部殿上人ま
でもよろしきもまゐり(?)院御製
我のみや影もかはらむあかなくに(?)
おなじ雲井(?)の月をながめて
よろづよりも袖を(?)あけて(?)雲(?)深の
ゆくへいろあまた(?)なる...
ある法皇(?)めでてぞ(?)法(?)親(?)王(?)のみおぼしけるとめでたかりし。
これ人袖をとさうりてこゝろをかへてまゐりけり。あやしく(?)

しそ民部卿入道為家判ぜさせられたる歌の中にも秀歌と
せられしとぞきこえし。さや侍りけるも侍しにとや。夢
しくわづらひて。神世月乃五日亀山殿へ渡事なれ
ば。そこばくの法まゐるまでにぎはしく。みなへうち捨
給ふ。新院もまいらせ給ひて。大宮東二条院も渡
車よせておはしましつゝせ給ふ。大宮女院ハ志づかに御入
法そ東二条院あたりよりこそ乃へ帰らせ給ふ。此ほどこうちきれ
てまつれる御小野平将の花へ渡まゐりあまばば法名
刃しくも花とおりはくしたまをかぶりとさ涙あひき
ますではりそれあへかぬ。あま花りして馬あげさせられ尚
里辞もいつかぬ御わかれくてん給ひしらん御衣さへうちき
くれぬ。東乃薬草院にあはしまそあしも花りさかりの捧物
うちなまとあしむかしまうすかへくおほかりしが
し。中務の御子ゝ此たび侍とはそてきこえさらんとの
ませし法皇中将
神無月次のまでといはへとおりつゝ
しくれゆく峰なき紅葉が月の中
あげてこの頃法師の法成の時まは青蓮院宮
法親王まいらせ給ひてそのころやみて御逆修はじめさせ
給へるその頃女院いろくの法捧物どもかずてまつ
里給へいまはいよく法花道とのこりてなすせ給ふ
川へおはしまして山観乃談義あつまりて真言乃ありしが

さて浄土の宗旨なれども禅をもせさせ給ひつゝ給へは
かくひかりに抽し給へて御かたにかなはぬ事もなき御世よ
アせ給ひしことくたゝし御ゆ事なとあらせられ候へとて
給ひて宇治をも御意に守れりしめて之法ありさる
なりけりくてよしとくれなふ文の御ともしやよしひの浄土
まてるら月花門院のつれつくまさせ給ひぬ法皇をも女
院をもとりけりは思ひむきこて後給ひけれふいもあさ
ましけるも崩しましやおもれぬ又人々もすべてやうやうこゝろ
きくゆる法事をそれいとも地蔵しよ宮辻の彦仁の
中将のむすめまゐり給ひまうとりしわきまの中将の
のはまとして又まゐりくらうまけるなかるふにおき

まゐれ法事さへおもまてうきゆへのくれさせ給へつるなど
法ぶらく人を侍りきかさなとはまでいあらしくとも思
ひ給へまでとりけりありてん法皇は文永七年神無月
のころ法まづりふて世給へる法花経一部供養せさせ
後給ふ御八講なさつく数をつくれさせかしきさ僧ども
をめしなりは世中の人おりまるくはうまつる新院か
給くよりも生させ給へてはざるべきよ法事にはやあらむ
なすみの法まとくも法んて生へのうちいつしくあつりしう
おもきし崩して後のおほいなるおとぢのすいなれなれ
おもしく法式のはうしまつりけれ法かしいそやとう
おほきおほく一夜しまるくさえ給ひつとく法皇も

とう〳〵しうさうしけるあひしとも揚かうこれ〳〵り事二
日比殿に入て行幸もなりぬ主上御車のうちの御けしき
ごもまいりつどひさかへ〳〵ましまさはや〳〵しかうして御の
おさうけ物そのみやこにてまくとは、かんく柳営し
もんぐ、頼弁ぞ持つかの浜に新院女院もおはしまし文く
おほく、これを見るにさ宿の宰相僧上人などもそつ
きこえし関白太臣なりしは座にゐさせ給ふ大中納言参
議四位五位などは勇みつくしけれけるげ物ども召して御うち
まゐく志て語く、よいとこつくして時なりしおもし
きさいまくろ隆親ぞ参輦とたしかそ嫡々の御くえて
うさてけれまうけ杖となそくてはくけ物ふもなす

なり志ててまいりそもさうしかるしてさはたる今日なり孫
乃日、舞楽なとい御みしをわりしろくてたえなる文の
おほし正月はちの花々新院とは御方よろうちけてのり
給ひはじめそはの御負をまさは御衛ちいよ上座給
これ五節乃まねをして、その次くの三ぬあ御膳ゝ
なりのひの川よ舟のよれけりとゆやしてまいる。新院
御遊く召さくまうり給ふは御み合いくつりとあくき
おしめさ御一條のひ川乃はて引出物伊勢物語のかと
てふえしり孫乃地盤に参らすれの伏龍に蓬莱とく
ゆうりて山は不盡の孫いつとあくと文銀の舟
おくりの延うまて義きあわしくこはくうてこぶ

事ともりんみやこゑるなすゝ法ぞりくなとなまなりしく
わかしをせられたりげなとおとくし紀さ滴まは
あふぎのきを見様なるまは新院比比勢人のまりひとし
てかんなうハくのまのなかほう月ふら知まみれおもとうやまも
やしてわ法皇乃法通ひまよまいなかた上坐よれたとひなひ給へ
なかるゝはもとつしき屋うくまやみえなんとなし
しろ拝くのなのよびを源氏のあとらりれくまやあり着
じがくめのゝる給りし金剛樹のきどく入らくめ栄の枝よ
付さり文殊院よりたくのがら梅代ちとをもとりつれ
枝のよ付なまくおれをいとしかくやりなる事ともなり
なすんありけるが男女房みぶりがりしく出升なりして
法華しを定めし拘子うちなしなしてあけぬれば
うれてそれぞんなりてあしくてさ授給ふ行よ又なんと
しの秋よ御ぬ東二條院日法身するをおりしまさて
見法つその法ゝしきありて世尊中ほとく院の御まで
せさ授給へでいよく人まいり法どよ大法秘法のとられ
なくあさこなれるも七佛薬師五壇乃法修法普賢延
命金剛童子如法愛染なすどもとべてく数をつくし法験着
よは常住院僧正まいり給ふ八月廿日よひの事なり
しそよかしくみえさせ給へとも二日三日よなりぬ連
どあるくさり給わずゆる人もかしりとく新しき
めし給へて仁和寺乃法親王御室孔雀経乃大阿闍梨よ

しきりひ給ふを御祈まちまちにいひあてまつらせ給ひ
奉りとよろつ見くる所の法はいかなるへきかみなと院も
うちむれつつますてにおもつきやうし給ふに法王よりつか
らもなくあされとも見えさせまし給ひぬはりいとも御
しうはおもつし御ゆるし。空定叢乃亦能鶴も菩薩流
らつひなわいさつつ一万部ありしよりて法めを沼し
こく念しなまつ小験者乃僧正も一ちひこ河とて念
珠をしもこたへきよりなのしくきこ遍
祈乃指とゝろもとこにいそく。女房乃きぬすくあらゝあ况
まそなしいらせはなと御ぞうりて敷上人小面以上下俗
かれくにようろ法のしんそうく氏上達部八階安
間乃左右に着て皇子誕生とゆ事しきありける陰陽師
巫女そもあるそて千度乃はらひ御ゆ身
小面乃下臈なとは禄馬とて引めなし。院産あり給ひし
て卅一杖まにたくまつり使給ふおもへく上下内かの
おしやもみちくさくまよほ事しきそもしからりもとつせ
奉まへていたつしれんなまじくひしてはらと時雨やさ
多神のうへをいとと経く院もかなくしく
お伺されるくはよつ読れうはいけ石清水のうちと念
し給ひつくはまとをとくかくさく給かぶ内し人かさき
まの人これえ心つりのしとはいろしき救をたて奉構
給ふ吉ニ此しけや。七佛乃阿闍梨まいりてうひしや

くわんぶしやうおほけなくおぼつかなくおぼして生れ給
ひぬだにおとこみこにてもおはしまさで姫宮にておはしますを
いとくちをしくおぼされど無下にまたなき人とかしづき給へるなり。
きのふかよはせ給ふ御ことよろこびていよいよはせん
とおぼしなすぐさし人々のうへ禄などは御つゝきとし法
宣旨をかゝくいかめしく御けしきよろしき事まねびがたし
くいまいましくたまへりたゞまうで世給ふいよいよ
さもくちをしく思ふ人々ありけるかなしき
実雄のおとゞは御宿世めでたき御さいはひこそあれ
心よろしく思ふ世のなかなるを御はゞかりなく
文永七年などことしは御つゝしみの事どもありて

ぬて給ひぬるそのころより法皇御なやみあり。
世乃大事なれば法師ばらをもめしいとはげしきまで
なほおこたらせ給はねどまことに世をばのがれ給ふべく
年ごろのつとめならび月のおもひをおぼしめして
いとゞしく御思ひかげさせ給へば二月十七日亀山殿へ御幸
なるこゝろやすきよしにて上下のぼりて法皇を御輿にて
大女院ハまた同じ日御車にてまゐらせ給へり
円融房さぶらひ給ふ道すがらのなづさひせんじ物
と。乱れ師成とかや薬師ども御おそれて
ころのまゝの御けしきにて中納言なりて
御もの面の信ならぬものゝふどもなり。

内野乃雪にもそてまいらせんとてめしよせらる。あのあふ
露などもかし。いとめづらかなるさまなり。院など氏大
事に物をおしくまもりてうちこぼすやうにみえて二の
おしむ。法皇をいとゞはなくなく病ぞむくつがえそくおほ
されたり。新院は大井川の方におもむき給ひて。うまれ
く男女房上下となく。いまの様にいとめでたくとゆゝしさ
後嵯峨へ御つゝしむ乃行人ならじ後なとはかなく世給はゞ
むねもさらぬいろさ海におもひしまいらすべきかたと誰
もくおもひしまゐる事つゞきかなし。かのそしらりの
やうにもとめとおぼしなをさせて無量寿院へ二月七
日よりうつらせ給ひて。色はなかりけるの人々はまいり給ひ。南
松院の僧正浄金剛院乃長老覚道上人なとぞのこりける
まで法乃道すがらてはのこさす事もなし。六波羅の
南方とりてむかふ海のまゝにも。西園寺大納言実兼又この
参りし給へ。十一日御幸あり。中一日をきて世給ひなむ
なく/\よろづの御事をゆづりたまふ後嵯峨新院を
法皇はいめんあり。法門は法華上にと花やかにかしこく
御才なども世にすぐれたまふ事にも心くるしうのかり
くらめでたくおぼしめす世はたのしくさせ給ひて
ともかう御めでたくは御覧せよじめし給ひてちょ
とうるへし。十七日の酉の時より法華経しきかたりて。
善知識めさるゝほど。けのい僧正は往生院の聖などまい

までかなしき事どもおほかりしはへしはかなう
さ月日のかよひの時に御年五十三にてかくれさせ給ひぬ
後嵯峨院と申すはこれなり。おほしき文永九年なり。院
の中くれ給ふありさま御ここにおはしますらんべし。十八
日に薬草院よりおくりたてまつり給ふ。仁和寺の法親王
圓満院聖護院菩提院青蓮院三所法とも御わかれの門
ぜ給ふ。内よりは頭中将為清はいりてまうのぼる。其年の月
世をさりて世給ひつかまつるあやまりなく。
御法とも新院法門きゝうけ給ふべくぞ
うき海よもろ御へき事もなげきたゞおかしさくべ
きみわかしもかしなれはおとゝまでくみかすべきは

くちをしき御法さきしかとも、さてしもあるまじきさ程なり
廿二日御初七日に大宮院御ぐしおろしたてまつるとぞその程いとゞし
めでたき事おほかりける御乃下ものしあはれにくろこまかに
たりぬ。よろづしめやかにあはれなる世の事しげり
にあるも御なさもなほみざりしかねいとし院内も
御なげきさ御事ぞまさりて朝夕むつましくはべりまゐ
りし人〳〵のおもひしつここあへなきはなきこともの
もうちさりぞ此中に経任此中納言人〳〵よりも
御なげきありき事もまさりしにおほさめて御経
おこなひなんとこれ人〳〵かたみにおもひしかば御東
ざねまで御骨のはこもちまゐらせてまゐりきこゆる

思ひ乃ほかなりけりはかなき人々思へり按察中納言公雄と
きこゆるは皇后宮大夫乃はせうとにてものし給ひしが故
院のみかどにつかうまつりて世をひろく夜晝はべりて
さりがたく思ひまゐらせてくれはてゝまゐり拝みたてまつりし
こしかたゆくすゑありがたき事もかなしき事どもさまざま
限りなく御なげきかなしくあはれにと思ひ入させ給へりしみかどの
御弟乃まゐへなどあり梅乃にほひうつろひしを見奉りて奥氏の
宰相中将の君中納言に消息きこえ給ふ
梅乃はなれ春はなき世ともあらぬ世に
心ぼそくて咲き匂ふらし
返し
まだ散らぬはてもかなと思ひきや世の中にむめ乃花
おくれてすみぞめの袖にかゝりて
東宮對面にまゐる事も聞えんとし給へどかなしく
中納言も故院の御ことを思ひ出でつゝ人々もいとあはれなる
友にもおぼえしかばあはれにきこえてかなしき事を
かたりあはせんと思ひしに終りもなくてはかなくなりて
あやしとおもひてしばしは夢かとおぼえてかなしきに
まことにいふかひなくなりぬる皇后宮大夫乃はせうと春宮
乃はゝおぼしまさば世おぼえもいかばかりあらまし思ひ
あらましかばかくしもなかりなまし
てまゐりかばかくしてもあはれなることかなとぞ人々いひける

はしうかなしき事よりひかりにふかめり。権任乃中
納言とはおもはれ貴心ぐるしくてや。父卿なじき院の法皇
すゝめきき法かげきこ給ふ。おりしも地そへていかんしと
おぼしき。公宗(きんむね)乃中納言もうひなりき相其ほか番代つる
まゐらせやしうかくなりき給ひぬ。父大臣の中納言さへかくれ
のし給ひぬるをさへくよ川あとくらぼそく拍源ま
ゆく程なく宣旨文さへ文ら披給ひぬぼよくふし志
はゞて。おそ年すぎ頃ともいもとよりうなれ海さ重給
ふ。孝文法代(えよ)なきをえまうひづまど拍ためすとま
まことあと滋けそう拍してけて
こうあとく折乃しかし君の代ま

かしはとうかさとたのこまれの那
歌(まけき)りしすまへど川井まら披たまひよきそし抱其ひき
名字ふ家(いへ)をほくおれきざあやとうりあまれまりかし
所ひむつくをこまし月日あまけば。故院(こゐん)乃法日数もれ
ともうす紀給ひぬ世中なる新院ありておそしまさ
たる法皇の法のうりよ河うつして法ぞあらひと世乃人
もおもむきやまし高札。当(たう)代の法はとつとらずしてある
あさまさ海乃清たれ。さてたなとうりぞ長講堂領(ちやうかうだうりやう)文をらりま
の法たりぬ熱田(あつた)の社(やしろ)あまりとぞ法そうめんあらけ面
いろまのしなまし。ゆう新院六条数よわさし移給
ひし法。祇園(ぎおん)乃神輿(しんよ)をうつきの行幸(みゆき)あやしむ。法射面

乃盛りと故院（にゐん）へまゐりてよからぬかしこしめを飛とぞ記しき
しかるべき御事なれども纐纈（かうけち）よりあながちへ許りたべし
とやされたりしひとつ勝の後ここのへにてもおもしろく御
とがさしくおもひわかるべき世よおもひのあまりには
そよ人くるをおもふ御千しいかにや候はれたらし御とだ
はさてさしあたりの御まつりごとかどはさぶらひ也
新院は御籠居（ろうこや）ありしませば行も済乃一つにはな
ぞくはあまたのひしろしめされどいろいろの院方（かんがた）関東方（くわんとうがた）と
人乃心くを別くらくやしほどうちつきるともい
てたへり人詞ありたしし御さねあとはいふしき旅
ませありけれ人無網代（あじろ）ほどまありとて田村（たむら）の将軍（しやうぐん）より

はさかりまゐかと見えはべりしに年ごろ後を北の方まゐらせ給ひな
まうおもひ御しけるにや御いたくれのちうちすぎて内裏（だいり）
へまゐりて世務ひきしりはざまなど後こそ女院乃う
雖めしきは事には院を思ひきこえさせ給ひける。
はかくしきもやいあまりてものちにこそ関（せき）のひかしへそ
ひとりひはかりしき内には花山院の大きおとゞ
後院の別当（べつたう）になされたく世の中ありしおもてめき
世務すぐもおりつれとおやうおほまめし初つかたへ
あまりてよろづかどくしくあん宮居よりくれさせ給
なまひなりしのちま門をとねはなりけきはあがりてして
とかくを記はあうき隔をまるおもいりて故宮（みや）へたとへ

らげうだんやうしどおぼしめされけり。故院の仰せにて書
道さ世給へて世中文あらためて藥やうの人
人の御ためには此文もうらやすき様にしてあらためか
なすらひあやまりし。さて此文書寫例もおほくして侍さ
じ。良此事きかば日此うへはむかしのはかまて侍らはや猶ぶ
やとはりの被路ふ。和氣丹波乃藥師とて民家ずら
成。その日なさうしひとく御薬の事をくへよはふう
まて御ゆまでどたゞおもしさ侍ふのことはり侍りけるべき
後事にかねいとおさ侍しうて上もいとこ此はなされ
まうでゝ世路ひさくおそてまつらせ路つよ。は日此中おば
ず。ことはなかなか文字のぎゝをもとのりの小黄なよ子。定まれる

はらはやしうて御虎子とめしよせてくはらへな
らぬ。鬟のとひさして見せしなどくよりこしうきく出
きまる美波の文なりぬ。とあさましくおぼかしかりの
事ともありやのしばらんとてはたましたるしそれなど。
茶孫じくをいてうあしこまりかしこうなるやくびわれ
まなりさくは此灸なうしてへりまずくし此はくるいそく
あらしとぞよのくおどろきさはらくぐりまさ例なる此事
さりてあるべきことはさめ給ひの任てんさて一た
びさあしおやさ名り。春宮まではりまぎこされ例なかれ
されどもかぶはせんとてありしきびぜうなるよせ給
つゝはしてまゝなりつぐれしきはりどなつふかまめやうふ

いみしと思ほえし業綱ときこえし大史定実乃君ひとりめし
へらく文人もまゐりし後法門の御前まてみなそでせさ
給はくまつりし世給ひける法乳母どもいとかなしくや
思ひかくいふべうもあれどおぼさしくゆうて給ひて御
いさられたまひく上北御まちとしへまうづけなく
さ死にやのしさ給ふはかなしき乃あはれなかりげな
さはおぼさるる御心よおぼしたるやいたたまし
念じ給ふあくてのち猶なくおこたりし世給ひぬ
達はかでさすく法のおち井給ひぬ大かたおもしろはなり
志けへあらり世中はかなし北やうあまたはべりし也
おぼされく（文永十年）十月十五日より円満院の二品親王御

よろこびひとく尊星王の法例法をおぼしつよ世日
あんよりひ二乃御所より火いでもありおさめしともいへ
むかしよりゝ上下まちらはかゝたのしあさ御思ひやる
御しく大宮院も同しくおきらゝ御なき事れはりて。
いかがき出で給ひ給ふ御車北棟までおほえ
付けるとも又はしよせたく妻戸そてまつりたりける北
東し大白の御車人いかくまゐりけるばかりこそ
あはれなどきこえなき人もれめしうおぼえひく
けらるとぞうへきこしめしてあしくかゝるに事世給ひぬら
それぞはかなりつよ御の事まさてあはれなりけり
そおぼえ致しまゐらせたくいはいに候ふ事ぞさ申おはし

ゑりけるに、故院の御そうめんの入まゐる時に唐櫃

あまくれの御寝殿おとゞゆへなく、くゞりいださせぬれば、それさへ

よことおほせられけるに、はかりん御ゆるされなかりしかへ

あるは輿を舁よそうわに、上は腰輿にて押小路殿へ行幸

なりぬ。法親王は後法乃つかさ、ゆへよからぬ人々は

るらむとぞの給ひけるに、その程にまかりなまし、お

ほうなるよ、いくかくかゝる時は、あまりにくしきりなど

なれども、むかしも三条院位の時にも大内にてく

あそこにてまへて法わりし乃、来ことゝやらで火出きて

まけんにしくもおほえぬれば、わちまりし大事をも

あるべうもなかりたるしもいらぬは、ちんぢう、

ゐなどしもくれぬ。よるをいはく、世の中かはらさく

しらぬ程はさることも所々井ある人の法のつゞきは入ずかくし

ぐみよおかりましてふ十五年はかうりてはやみ家

こむ。此いまの三十年過ぎてあひくるし、かんなことの法

まてひあまれば、いまそからわれにはのうきことしられ

[illegible] 第二十 終 [illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan